溯航　第39号　1頁　2021年2月
早稲田大学大学院文学研究科考古談話会編集・発行

この特別な1年に寄せて

高橋龍三郎

今、2020年の暮れを締めくくるにあたり、この1年を振り返る言葉を探してみた。「感染」、「禍」、「劣化」、「人災」、「社会的距離」、「密」、「Go to」等々、あまり良い言葉がみつからない。世界中が「新型コロナウィルス」に翻弄された1年であった。景気や経済の後退をはじめ諸事に停滞感が満ち、充足感は失われ安心安全の達成は望むべくもなかった。春先まで社会的モットーであった「絆」という言葉は、人と人の接触に疑いが向けられ、社会的距離が喧伝されるようになると、途端に分断的な響きに変わった。本来の意味とは裏腹に敬遠されがちであったように思える。そういえば「社会的分断」もこの1年を特徴的に表す言葉だ。

気分は丁度10年前、あの3.11の東日本大震災の時に近い。あの時は大学の機能が麻痺し、ただ無力感が全体を支配した。卒業式、入学式は中止され、大学暦の節目が取り除かれてしまい、無限軌道のように回っているだけの1年であったように思う。ただ、学生たちの交流や接触は損なわれなかったと記憶する。だから今回とは全く事情が異なる。

今年、考古学の卒論や修論、博士論文を書いた人は、この特別な1年をどう振り返るだろうか。手持ちの資料や書籍だけで論文が書けるわけはない。多くは図書館、資料館、博物館、埋蔵文化財センターの資料に頼らざるを得ない状況に変わりはないのに、大多数の施設は閉館や利用制限に追い込まれたままだ。考古学研究室も同様であった。このような中で執筆のモチベーションを持ち続けることは困難である。大変な1年であったに違いない。

そのような事情を考えると、この度『溯航』第39号を刊行することの意義は頗る大きいのではないだろうか。6本の原稿の執筆者の皆さんの地道で文字通り「奮闘」の努力に対して敬意を表し、教員として感謝の気持ちを伝えたい。

私たち教員は研究、教育、社会連携など大学が担う使命をどこまで果たせただろうか。コロナに押しつぶされて「劣化」しなかったろうか。今年は4月から教場授業が中止され、すべてオンラインに切り替わった。教員は春期、秋期の科目コンテンツを製作することに汲々とし、結果疲労困憊したのではないだろうか。余力をもって研究に邁進できたか、と自らに問えば空疎な答えが返ってくる。大学院生諸君も慣れない準備に追われて大変だったに違いない。

このような日常では、社会的サーヴィスの低下は免れえない。2021年も覚悟はしている。私たちはどこかに突破口を開かねば、この隘路に嵌ったまま遅い流れの中で窒息してしまうだろう。いやいや世界的な感染症なのだから、あえて抵抗するのは止めておこう、病災が収まるまで、時の流れに身を任せてみよう、という気持ちも一方にあるだろう。

このような通常ならざる日々にこそ、私たちの胆力が試されるのであろう。やはり我慢し頑張るしかあるまい。

ふと、本棚に目をやると、A. カミュの『ペスト』が眼に止まった。40年ほど前に、北アフリカの旧石器資料を見るために、アル・フスタート遺跡の現場を終えてからアルジェリアのオランという港湾都市を1人で訪れた。偶然この文庫本1冊を携えてオランの博物館を訪ねたことを思い出す。オランを舞台に1人の医師がペストの蔓延という絶望的な危機の中での獅子奮迅の格闘を描いたものだ。どこか今日の状況と重なる。銀色のブックカバーは擦れてカビ臭くなってしまったが、内容は斬新であったように記憶している。

皆さんの地道でひたむきな努力が10年後、20年後、30年後に見事に開花することを祈ります。